長野県軽井沢町・市村家所蔵
尾崎行雄(咢堂)関係資料所在調査報告〔補遺〕

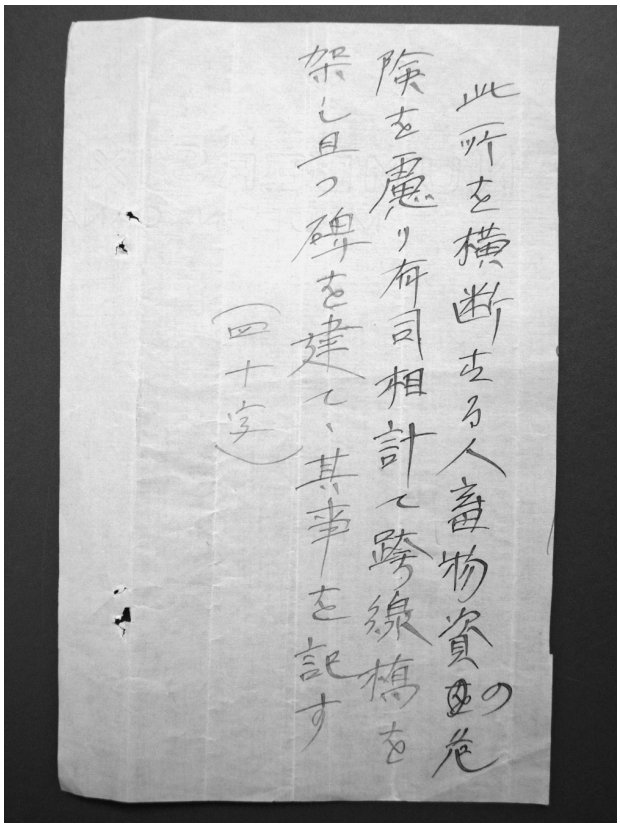
土井 永好

1　補遺資料について

長野県北佐久郡軽井沢町在住の市村 光氏が所有される尾崎行雄関係資料については、すでに第22集で報告した。その中で述べたように、やはり別系統として保存された市村一郎遺品類に若干の物件が認められたことから、既往目録を充足させることを目的に追加内容を報告するものである（本文中、故人の敬称略。以下同じ。）。

今回の補遺資料は、当館平成26年度秋季企画展「尾崎咢堂没後60年展　～咢堂と支策の人びと～」に向けた市村家所蔵資料出展交渉のために訪問した6月に発見連絡を受けたものである。少量8点であったことから、記録調査は企画展閉幕後の11月に実施することとし、調査方法等は従前のとおりとして協力を依頼した。

当該資料の内訳は、以下に示した書簡1点・電報2点・古写真5点である。書簡及び電報は「倉賀橋架橋関係」の石碑一件書類から、古写真は台紙から剥離後に無造作に収められた写真帳からそれぞれ見つかった。このことにより、市村一郎由来の尾崎行雄関係資料総数は230件379点〔内訳：書簡155件294点、電報9件9点、書画8件8点、写真40件42点、その他18件26点〕という結果となった。追認された資料は、尾崎の軽井沢生活や地元の課題解決に尽力する姿をさらに映し出す内容であった。



▲倉賀橋碑文の原稿

（目録番号：Ⅰ－155）

▲峠道の市村と尾崎

（目録番号：Ⅳ－39）

▲川漁の見学

（目録番号：Ⅳ－40）

付　〔市村家所蔵・尾崎行雄(咢堂)関係資料追加目録〕

【凡 例】

1) 当目録は、『相模原市立博物館研究報告』第22集（2014年3月）で報告した後に新規発見された8件8点の追加目録である。
作成は、同じく相模原市立博物館学芸員(歴史分野担当)・土井永好が行った。
2) 種別分類や項目別記載方法は、既往目録に準拠した。なお、資料番号は混乱を避けるため既往目録からの通しで付した。
3) 所蔵者の許可を得て、掲載資料の一部画像を別掲した。

Ⅰ　書　簡

番号	資料名	時期	作成	受取	形態・数量	寸法(mm)	内容・備考
155	撰文原稿 「此所を横断する人畜物資の危険を慮り有司相計て跨線橋を架し且つ碑を建てて其事を記す」	(昭和3)1.6	尾崎行雄	市村一郎	状1	182×116	前書き部がある書簡を裁断したもの。内容的に〔書簡Ⅰ-5〕を切断したものと判明。市村が依頼した「倉賀橋石碑」の碑文を40字でまとめている。架橋経緯から察するに、文中の「有司」(役人のこと)は実情に甚だそぐわないため、「有志」の誤記と考えたい。

Ⅱ　電　報

番号	資料名	時期	作成	受取	形態・数量	寸法(mm)	内容・備考
8	「二五ヒマデ ザイタク」	昭和2.12.21	尾崎行雄	市村一郎	状1	220×147	発信局が「トウケウ」(東京)なので、「ザイタク」とは転居直前の上品川の旧宅のことと思われる。
9	「二二ヒ ゴゴ カナサワ ニテ アウ」	昭和3.4.19	尾崎行雄	市村一郎	状1	220×145	「カナサワ」(横浜の金沢？)とは、転居作業が済んだ逗子の新宅(風雲閣)のことであろう。裏面に市村筆跡のメモで「伊藤博文云々」とあるが、この電報とは無関係か。

Ⅳ　写　真

番号	資料名	時期	作成	受取	形態・数量	寸法(mm)	内容・備考
36	木蔭に立つ尾崎行雄	不詳	—	—	1	56×44	ニッカボッカにステッキのいでたち。服装と焼付の大きさから見て、〔写真Ⅳ－5～10〕の一連の登山風景における休息時ショットと思われる。
37	登山する尾崎行雄 その3	不詳	—	—	1	44×57	撮影場所は、〔写真Ⅳ－5・6〕と同一と思われる。夏向き軽装の三女・雪香との2ショット。
38	橋を渡る尾崎行雄ら	不詳	—	—	1	59×44	おそらく莫哀山荘に近い二手橋のたもとから旧軽中心地方面へ橋を渡ろうとしているところであろう。尾崎と市村のほか5人の姿(うち2人は洋装の女性)が認められるが、木の影で人物特定は困難。
39	山道を行く二人 その2	不詳	—	—	1	76×96	〔写真Ⅳ－19〕と同一日の連撮で、場所を違えてのショット。当該写真では尾崎はハンチング帽を被り、市村は外套を脱いでいる。道幅も広く、砂利敷きが自動車往来により全面的に転圧されているようなので、やはり碓氷峠の山道であろうか。
40	千曲川の簗漁場にて	(昭和15.8.26)	—	—	1	109×156	画面に写っているだけでも大人・子ども38人の大人数で川漁風景を見学している。尾崎は左端に写り、白っぽい背広姿で岩の上に腰かけている。当館寄託資料の尾崎行雄日記に＜昭和15年8月26日、子どもらの家族ほか30名ほどで、千曲川の鮎漁を見学＞とあり、それに符合する写真と思われる。

２　既往目録の補正について

前述の企画展準備における展示資料調査の実施過程ほかで新たに情報が得られ、前号掲載目録の一部内容を加除筆しておく必要が生じた。ここに該当部分をゴシック体表記で修正し、以後に備えたい。

Ⅲ　書　画

番号	資料名	時期	作成	受取	形態・数量	寸法(mm)	内容・備考
4	「風雲閣上望風雲 渝盟背信何紛々 西欧驕児弄威福 東亜庸人煽妖気 擁書萬巻夢孤鶴 歴任三朝伍鶏群 喜寿加七舊**朋**減 衰残尚学救時文」	昭和16 秋	尾崎行雄	市村一郎	屏風1	本紙右:1348×661 本紙左:1346×662 屏風:1747×1745	**日独伊三国同盟を批判した七言律詩とされ、「偶感」と題し前年に創作。**83歳直前の**書**で、池ノ平へ移る前に贈呈されたものと思われる。「風雲閣から世を眺めるに、西欧もアジアも乱れに乱れている。年老いて日々を生きる民衆の一人に成り果てているが、この国を救うための文が書けるようもっと学んでいきたい。」が文意か。**尾崎は作詩にあたり、評論家・ジャーナリストの茅原華山に添削を依頼したことが当館所蔵資料から判明している。**

Ⅴ　その他

番号	資料名	時期	作成	受取	形態・数量	寸法(mm)	内容・備考
1	「革新党組織に察し予が政党観を述て同志諸君の教を請ふ」	**(昭和2.6.3)**	尾崎行雄	—	冊1	274×200	**わら半紙二ツ折5枚の謄写版印刷だが、尾崎の筆跡ではない。二穴ひも閉じ、虫損・シミあり。革新倶楽部左派系の中で尾崎と決別した関直彦・大竹貫一らが結成した小政党「革新党」発会式での演説要旨。革新党は結成5年で解党したが、昭和24.4発行『咢堂思想』第4号に理由不明ながら全文掲載されている。**
12	「義人擁巻拝英雄 桃園聲高擁憲功 □□□雲□泊遇 秋山啼□杜鶴紅」	不詳	**康有為**	**尾崎行雄**	状1	182×243	**和紙切り紙に鉛筆書きの七言絶句。市村の筆跡に似るも、筆耕者不明。作者は中国清末の思想家・政治家・書家で、政治改革運動「戊戌の変法」の指導者となるが失脚し、香港経由で日本へ亡命した。尾崎との親交具合や軽井沢滞在歴の有無等も不詳。**
15	尾崎行雄胸像	昭和4 秋	名古屋咢堂会	市村一郎	像1	142×150×290	№6で頒布されたブロンズ像。正面基部に「咢堂先生」、背面に「昭和四年**秋**　敬作」及び「□哉」(囲み)の陰刻がある。**作者名は古田敬二だが、経歴不明。**木製台座があるがオリジナルかは不明(釘打ちの処理が雑なので、市村が用意したものか)。